
● 北 陸

響 敏 也

着衣に「普段着」「晴れ着」がある。

都市（まち）の時間にも当然、普段着もあれば、よそ行きの時間もある。たとえば「祭り」は、特別な「よそ行き」の時間だ。いわゆる「晴れの時間」。

ところが「晴れ」の時間は似てくる。晴れ着や盛装と同じだ。そこで文化の祭りとして「芸術祭」や「音楽祭」を眺めていると、情報社会の現代だから次第に国際規格になり「どこへ行っても同じ」になる。これは、言ってみれば「ローラーで地べたを一気に均（なら）す」状態を連想して、やや怖い。

こんな時代だからこそ「制服」でなく個性が光る「普段着」が大切なのだ。一人ひとりの生き方やお洒落が違いうように、どの都市にも、それぞれの「普段着の祭り」があっても良いだろう。それがビタリと、都市の性格や規模に合ったとき、都市は芸術を呼吸し始める。日常のなかで現実の持つ意味が輝きます。

冒頭から随筆めいて、年鑑に似つかわしくない文章で始めたのは、昨年からことしにかけての北陸3県音楽界を語るとき、どうしても触れねばならない話題への導入に、と願ってのこと。

その話題は音楽祭のこと。フランスの都市ナントで始まった音楽祭。多くの支持を集め世界各地に飛び火して、日本でも東京、金沢、琵琶湖、新潟、鳥栖などの都市で開催され好評を博してきた『ラ・フォール・ジュルネ (LFJ)』のことだ。関係者や近い位置にいる人にとっては、特にこの1年は、「LFJ地震」で、揺れた1年かも知れない。

金沢を中心とした「LFJK」は、他の開催都市と比べても拡散性が強く、積極的に周辺諸都市に浸透させていく姿勢があった。だから単に金沢一都市の動きでなく、北陸3県に及ぶ動向だ。

現在では広く知られていることだが、その音楽祭LFJを離れて、金沢が独自の音楽祭の開催を宣言した。急を知った関係機関や音楽事務所大手、さらには音楽祭の創始者ルネ・マルタンも加わっての「騒動」となった。報道各機関への文書や電話、e-mailなど、激しく飛び交った。

結果としては現状で知られる通り、金沢はLFJを離れて独自の音楽祭を開催するという主張を曲げなかった。新音楽祭は名称を「いしかわ・金沢 風と緑の楽都音楽祭」という。熟慮断行、独自の道を歩み始めたにしては、平凡で退屈すぎる名前だ。役所先導の博覧会と思われても仕方がないだろう。幸いなことに当節流行の「ゆるキャラ」がいるようだ。こちらはルネサンス期のラブレアの奇想天外な作品の主人公で大食漢「ガルガンチュア」をモデルに「音の大食漢・ガルガンちゃん」。とりあえずこれならば呼びやすい。初年度は『ベートーヴェンがやってくる』と決定している。どこの真似でもない独自の音楽祭と、聴き手の幸福を願う。

北陸楽界が騒然とするなか、しかし独自の姿勢を堅持する風景も見られる。

富山のオーバードホールを中心に活動が続く桐朋学園アカデミー・オーケストラは、毎回ベルリン・フィルなど第一級のゲストを迎えて公演を成功に導いている。恒久的な活動として注

目していい。福井名産の品種名「越のルビー」は、人気アンサンブルの名前からアーティスト・バンクやオーディションの名前にまで広がり、すっかり地元産の音楽ブランドに近づいている。3都3様の動きが新たな北陸を伝えてくる。